

『天徳三年八月十六日闕詩行事略記』

訳注稿（八）

小野 泰 央*

（二〇〇七年十一月三十日受理）

〔本文〕

第九 松江落葉波 以紅為韻 松江の落葉の波 紅を以て韻と為す

左 順

呉松江上碧波中 呉の松江上の碧波の中

落葉 浮かび来たりて 木 漸く空し

戲藻鱸魚鱗欲変 藻に戯れる鱸魚 鱗 変ぜむとす

浴流鷗鳥影難通 流れに浴する鷗鳥 影 通り難し

斜駆水面風声錦 斜めに水面を駆くる風の声 錦なり

迴度潭心雨跡紅 迴かに潭心を度る雨の跡 紅なり

借問蘇州漁釣客 借問す 蘇州の漁釣の客に

其如秋半洞庭風 其如秋半の洞庭の風に其如と

〔校異〕

● 鱗—隣（群書）

〔語釈〕

● 呉松江—呉地方の松江のこと。「松江」は今の「呉淞江」。「夜渡 呉松江」懷古（宋之問・詩題）、「停杯一問蘇州客、何似呉松江上時」（白居易「池上小宴問程秀才」）、「隋柳堤遙 曉雪、呉松江遠繫 秋霜」（『類聚句題抄』大江以言「樹滋月過遲」）は「呉松江」の、「地縮松江秋水滿、人招柳市古風存」（『菅家文草』卷二「仁和元年八月十五日」）は「松江」の用例。 ● 碧波中—青綠色した波の中ということ。「長似江南好風景、画船来去 碧波中」（花蕊夫人徐氏「宮詞三」）、「春水消 尽碧波湖、漾影残霞似 有無」（元稹「雜憶五首」）、「遊魚疑 沈鉤於碧浪」、旅雁驚 虚弓於紫煙」（『本朝文粹』卷一・菅原文時

*人文科学系・国文学

『天徳三年八月十六日闕詩行事略記』訳注稿（八）

「織月賦」とある。 ● 落葉—落ち葉のこと。「悲 落葉於勁秋、喜 柔条於芳春」（『文選』卷十七・陸士衡「文賦」）、「七言。看 落葉」。応令（『経国集』

卷十三・滋野善永（詩題）とある。 ● 浮来—浮かぶということ。「来」は動詞のあとについて「くすると」を意味する助辞。「桃源定在 深处、澗水浮来

落花」（劉長卿「尋張逸人山居」）とある。 ● 木漸空—次第に木から葉がなくなる

こと。「揺 落江天 万木空、雁行斜戛塞垣風」（劉兼「秋夕書事」）、「軒皇自 茲去、喬木空 依然」（靈澈「奉和郎中題仙巖瀑布十四韻」）は「木空」の用例。

「花落 林間 枝漸空、多看 漠漠 灑 舟紅」（『本朝麗藻』卷上・藤原道長「林花落灑舟」、

「春暮林花枝漸空、紛紛散落灑 舟中」（『本朝麗藻』卷上・大江以言「林花落灑舟」）は枝から花が次第になくなるという表現。 ● 戲藻—

藻の間で戯れるように動き回ること。「網断魚遊 藻、籠開鶴戲 林」（許渾「贈蕭鏈師。并序」）は魚が藻の間を遊ぶように泳ぐ情景。「戲 藻 嘉 魚 樂」、棲梧

見 鳳 飛」（蘇頲「奉和崔尚書贈大理陸卿鴻臚劉卿見示之作」）、「遊魚戲 藻 數吞 鉤、鳴鹿深 草露沾 衣」（『性靈集』「秋日觀神泉苑」）「食 花 飛 去 雀、戲 藻 泛遊鳧」（『本朝統文粹』卷一・藤原敦光「初冬述懷百韻」）、「露深半染眠 沙 鶴、

風冷纔薰戲 藻 魚」（『新撰朗詠集』「蓮 紀 齊 名」）は「戲藻」の用例。 ● 鱸魚—はぜに似た魚。呉松江の名産。『後漢書』方術下・左慈伝に「今日高会、珍

羞略備、所 少 呉松江鱸魚耳」とある。膾にすることが著名で、西晋の張翰が秋風を感じたときに故郷の鱸魚の膾を思い出し、官を辞した話は有名。詩文に

も「萍 醅 著 溪 醕、水 鱸 松 江 鱗」（白居易「郡齋旬假始命宴呈座客示郡寮」）、「忽思 鱸魚膾、復有 滄洲心」（王維「送從弟審遊淮南」）、「垂 簾 白 角 簾、下 箸 鱸魚膾」（韓翃「送王侍御赴江西兼寄李袁州」）、「鱸魚膾 葦菜羹、食罷酣歌帶

月行」（『経国集』卷十四・嵯峨天皇「雜言。漁歌。五首」其五）、「近江大有 鱸魚膾」、定識休閑寿命長」（『経国集』卷十一・上毛野穎人「五言。和藤朝臣春日遇 前尚書秘公婦。病作。」一首）、「鱸魚膾 細、何必出 於 東 吳、菓 実 味

滋、誰 不 謂 之 近 蜀」（『本朝文粹』卷一・紀齊名「暮秋陪左相府書閣同菊潭花未遍各分一字、應製」）と賦せられる。 ● 鱗—うろこのこと。ここでは鱸

魚のうろこのこと。「天下之士、雷動雲合、魚鱗雜襲、咸 宮 于 八 区」（『文選』卷四十五・楊子雲「解嘲」）、「叢庭鷗、含 秘 沫 而 倍 滋。松江之鱗、煎 桂 髓 而 添 味」（『本朝文粹』卷十一・大江朝綱「早春侍内宴同賦晴添草樹光、應製」）

などとある。 ● 浴流—川の流れに体をつけること。「鳥浴 寒潭雨」、猿吟 暮嶺風」（許渾「発靈溪館」）、「呉岫雨来溪鳥浴、楚江雲暗嶺猿吟」（許渾「寄陽陵処士」）、「玄鶴雲中飛不 去、白鷗水上浴猶 乾」（『経国集』卷十四・桑原腹

赤「奉和清涼殿画壁山水歌」などは鳥が川の流れに浴している情景。ただし、「浴流」の語例を知らない。●鷗鳥―かもめのこと。「物我俱忘懷、可_レ以_レ狎鷗鳥」(『文選』卷三十一・江文通「雜体詩三十首五言張廷尉」)、「鷗鳥從_レ將天性狎、鱸魚安被_レ土風羞」(『荅家文章』卷四「江上晚秋」)のように「列子」

「黄帝」に載る海上の人の性を理解する話を踏まえ、世俗の思惑を憎んで、自由の象徴として賦することが多い。この傾向は禪宗との関係から五山にいたってさらに強くなるが、ここでは単なる情景として用いられるのみ。『荅家文章』の用例も含めて、「鱸魚消_レ宦況、鷗鳥識_レ歸心」(顧況「南歸」)、「不知鱸魚味、但識鷗鳥情」(孟浩然「与崔二十一遊鏡湖寄包賀二公」)などは「鱸魚」との対の例。●影難通―かもめが水面を通りにくそうにしているということ。

「影」は姿のこと。ここでは水面に浮かぶ鷗自身のことを意味する。「鳥影」の用例は「渡_レ江隨鳥影、擁_レ樹隔猿吟」(杜牧「雲」)、「秋光照不極、鳥影去無_レ辺」(馬戴「遠水」)、「白鳥影從_レ江樹沒、清猿声入_レ楚雲哀」(劉滄「長洲懷古」)、「影混_レ沙鷗加_レ点画、唳交_レ洲鶴作_レ反音」(『江吏部集』卷下「水中摸雁書」)など、「影」が「通」るという用例は、「松陰滿_レ澗間飛鶴、潭影通_レ雲暗上籠」(盧綸「陳翊中丞東齋賦白玉簪」)がある。●斜軀―斜めに駆け抜けるということ。用例未見。●水面―水の表面のこと。「無_レ及_レ浮水面、孤

絶落_レ関頭」(薛能「一葉落」)、「木葉迴_レ飄水面平、偶因_レ孤棹已三更」(羅隱「中元夜泊淮口」)との用例がある。●嵐声錦―山から吹き下ろす風のよう

に音を立てて落ちてくる落葉で、水面が色とりどりに染まるということ。時代は下がるが「客葉寒声嵐乱錦、女花残色露舒登_レ笄」(『本朝無題詩』卷五・大江佐国「初冬述懷」)、「菊色金残当_レ步武、葉声錦脆散_レ奇文」(『本朝無題詩』卷五・釈蓮禪「初冬偶詠」)のような情景が参考になる。「嵐」は山から吹く風のこと。「疑殺霽留_レ巖戸面、憐來_レ風落_レ洞庭瀾」(『類聚句題抄』大江朝綱「木葉有秋声」)は山風の落葉の情景。●迴度―遠方を渡ること。「迴」は

遙かということ。「度」は渡るということ。「翻_レ日迴度昆明飛、凌風邪看細柳

翬」(柳宗元「聞黃鸝」)は「迴度」の用例。●潭心―深いふちの中央部。「檻前溪奪_レ秋空色、百丈潭心数_レ砂磔」(顧雲「苔歌」)、「潭心倒影時開合、

谷口間雲自卷舒」(韋莊「桐廬縣作」)、「斜臨_レ嶺面挑_レ山霧、迴落_レ潭心卷_レ水煙」(『類聚句題抄』紀倚平「秋月高低明」)とある。●雨跡紅―雨のよう

に降る落葉によって水面が紅色に染まること。「早晩他山來、猶帶_レ煙雨跡」(戴叔倫「孤石」)、「幾年風雨跡、累在石孱顔」(李咸用「苔」)は「雨跡」の用

例。●借問―ちよつと尋ねること。詩の慣用語。「借問採薪者、此人皆焉如」

(陶淵明「歸園田居五首」)、「借問誰家墳、皆云_レ漢世主」(『文選』卷二十三・張孟陽「七哀詩二首」)、「借問桃將李、相乱欲_レ何如」(上官昭容「奉和聖製立春日侍宴內殿出翦綵花應制」)、「借問幽栖客、悠々去幾年」(『文華秀麗集』卷中・平五月「訪幽人遺跡。一首」)などがある。●蘇州―州の名。江蘇省呉

県が治める。「去年十月過_レ蘇州、瓊來_レ拜_レ問郎不_レ識」(元稹「和樂天示楊瓊」)、「何以_レ蘇州安處置、花堂欄_レ下月明中」(白居易「紫薇花」)などの用例がある。

●漁釣客―釣りをする人。「客」は旅をする人、故郷を離れた人の意。ここは白居易をさすか。彼は本詩の詩題「松江落葉波」の一句を含む詩(白居易「松江攜樂觀漁宴宿」)群を、蘇州刺史となった宝曆元年(八二五年)夏から同年秋までに制作し、卷五四に残している。「池沼足以_レ漁釣、春稅足以_レ代耕」

(『文選』卷十六・潘安仁「閑居賦」)「渚畔鱸魚舟上釣、羨_レ君歸_レ老向_レ東吳」(崔顥「維揚送友還蘇州」)、「樵歌野田中、漁釣滄江潯」(戴叔倫「喜雨」)、「帶_レ翼文迷棲鶴渚、欺_レ鱗影乱釣魚磯」(『類聚句題抄』橋正通「雲低与水和」)とある。●其如―状態・状況を問う疑問詞。「其」は、強調の辞で、指示語ではない。三浦梅園の『詩輟』卷六に「其奈_レ其如_レノ字、樂天最好_レンデ用ヒタリ。下二何ノ字ヲ拘ヘタルモアリ。拘ヘザルモアリ。句意ヲ審ニスルニ、其ノ字ヲ

加ル時ハ、イカンガセント云程ニ、セマリテ強キ也」と論じられている。ただし『白氏文集』にとりわけ多く見られるわけではない。「親旧知其如_レ此、或置_レ酒而招_レ之」(陶淵明「五柳先生伝」)、「氣滄渤以霧杳、時鬱律其如_レ煙」(『文選』卷十二・郭景純「江賦」)、「愁至願_レ甘寢、其如_レ鄉夢何」(宋之問「別之望後

独宿藍田山莊」)、「莫_レ道岐州三日程、其如_レ風雪一身行」(白居易「送元八歸鳳翔」)、「任意渾成雪、其如_レ似_レ夢何」(白居易「新磨鏡」)などの用例がある。●秋半―秋の真ん中のこと。つまり八月の中旬を意味する。「好日当_レ秋

半、層波動_レ旅腸」(錢起「江行無題一百首」)、「涼夜清秋半、空庭皓月円」(權德輿「酬裴端公八月十五日夜對月見懷」)などがある。●洞庭―「太湖」の別名。江蘇省にある。湖南省の南に位置する、いわゆる「洞庭湖」とは異なる。白居易は蘇州刺史時代に任地の太湖に遊ぶが(「早發赴洞庭舟中作」)、「十

隻登船何處宿、洞庭山脚太湖心」(白居易「宿湖中」)、「洞庭貢_レ橘揀宜_レ精、太守勤_レ王請自行」(白居易「揀貢橘書情」)などと、太湖を「洞庭」と呼んでいる。

〔口語訳〕呉の松江のほとりの青緑の波の中に、落葉が浮かぶと、木々からは次第に葉が

なくなっていく。

藻の間で泳ぎまわる鱸魚は鱗が落葉で紅に変化しようとし、川の流れに浴している鷗は落葉のために通り抜けられないでいる。

山風のような音を立てて斜めに水面を駆ける葉は色あざやかであり、雨のような音を立てて遥かに深い淵の底を渡る葉は紅色をしている。

ちよつとお聞きしたい。蘇州の釣り人に。これは秋半ばの洞庭の風と比較するのでしょうか。

〔補注〕

韻は「中」「空」「通」「紅」「風」で、上平声一東韻である。首聯では題字を「松江」「波」「落葉」と全て織り込む。領聯では、「戲藻鱸魚」「浴流鷗鳥」が「松江」を、「鱗欲変」「影難通」が「落葉波」を翻案するか。語釈でしめしたが、鱸魚は張翰の故事、鷗鳥は『列子』の故事を思い起こさせる。前者は隱遁の願望を、後者は人為にとられないということを主眼とし、共に隱逸への思慕ということで共通するが、故事の意義をそのまま詩の意に反映する必要はない。むしろ故事を踏まえなければならない、頸聯は、その法則から、落葉を山風と雨の声に喩えていると考えたい。尾聯の、この松江の風景と、洞庭の風景とどっちがすばらしいかと問うことは、不遇感も天皇賛美も見られず、純粹に風景に対する述懐となっている。

〔本文〕

右 直幹

緑松江被綺霞籠 緑の松江 綺霞に籠めらる

葉落波重幾里風 葉落ち 波 重なるは 幾ばくの里の風ぞ

声繞沙村和暮雨 声 沙村に繞りて 暮雨に和す

影逐煙島動晴空 影 煙島に逐ひて 晴空を動かす

衝涯始變鷗眠白 涯に衝きて 始めて変ず 鷗の眠りの白きなるを

暈渚唯看鶴跡紅 渚に暈なりて 唯看るのみ 鶴の跡の紅なるを

誰識往還漁父意 誰か識らむ 往還する漁父の意を

送秋多年老舟中 秋を送りて 多年 舟中に老ゆ

〔校異〕

●衝涯―衝泥とあって「泥」に「イ涯」の傍注あり（群書） 衡崖（日本詩紀）

〔語釈〕

●緑松江―「緑松江」での用例未見。緑の樹木が林立している松江のことと考

【天徳三年八月十六日關詩行事略記】 訳注稿（八）

えられる。あるいは「松江」とは地名ではなく、普通名詞として捉えているか。とすると、「緑」は「松」に掛かり、緑色の松が生えている江ということになる。

●綺霞―美しい夕焼けのこと。「歩遠憐芳草、帰遅見綺霞」（楊巨源「春日有贈」）、「迎日似翻紅燒斷、臨流疑映綺霞層」（楊巨源「和杜中丞西禪院看花」）などがある。●籠―ものを包括すること。ここでは夕焼けによって当たり一面が包括されること。「綺霞遙籠帳、叢珠細網林」（高宗皇帝「謁大慈恩寺」）は「綺霞」と「籠」の用例。●葉落―葉が落ちること。

「葉落蒼江岸、鴻飛白露天」（張說「蜀路二首」其一）、「送別枯桑下、凋葉落半空」（李白「魯城北郭曲腰桑下送張子還嵩陽」）などがある。●波重―波が重なること。「登樓睇去翼、目尽滄波重」（李群玉「秋怨」）、「笛寥寥、万頃金波重」（孫光憲「漁歌子」）などがある。

●里風―村里を吹く風のこと。「至令鄉里風猶在、借問誰傳義女銘」（許渾「題義女亭」）、「百蠻降伏委三秦、錦里風迴歲已新」（薛能「早春書事」）などがある。●声繞―音が

あたりに聞こえるということ。ここでは落葉の音についていい、落葉が風によってあたりを駆け巡っていることをいう。「声」は「食隨鳴磬果鳥下、行踏空林落葉聲」（王維「過乘如禪師蕭居士高丘蘭若」）とあるごとく、葉が落ちることによって起こる音のこと。「樵音繞故壘、汲路明寒沙」（劉禹錫「晚歲登武陵城願望水陸悵然有作」）は「音」が巡るという用例。●沙村―岸辺の沙地にある村のこと。「沙村好處多逢寺、山葉紅時覺勝春」（劉禹錫「自江陵沿流道中」）、「江城与沙村、人語風颺颺」（孟郊「獨宿峴首憶長安故人」）などがある。

●和暮雨―暮れの雨と調和するということ。「落葉和雲掃、秋山共月登」（李頻「山居」）、「独夜猿声和落葉、晴江月色帶回潮」（劉滄「送李休秀才歸嶺中」）は落葉と他の景物が和すという例。「迎秋伴暮雨、待暝合神光」（許敬宗「奉和七夕宴懸圃應制二首」其二）、「秋風暮雨斷腸長、懷古懷今淚濕巾」（《本朝文粹》卷一・紀長谷雄「貧女吟」）、「泉声近報初雷響、山色高晴暮雨行」（《統日本後紀》有智子内親王「春日山莊」）などは「暮雨」の用例。

●影逐―物の姿が追うということ。しかし、落葉が追う対象が不明であるから、「散漫祥雲逐聖回、飄飄瑞雪繞天來」（李嶠「遊苑遇雪應制」）などがあるごとく、「逐」は「繞」と同じ意味で使われていると考えられる。『文選』卷一・張衡「南都賦」の「群士追逐」の李善注に「逐、馳逐也」とある。

●煙島―霞が立ち込めている島のこと。「煙島深千障、滄波森四隅」（李紳「趨翰苑遭誣搆四十六韻」）、「孤舟畏狂風、一点宿煙島」（僧皎然「雜曲歌辭」）などがある。

●動晴空―晴れた空を見えかくれすること。ここでは落葉が舞

うことで、空の色が変化することをいう。「江城如畫裏、山曉望晴空」（李白「秋登宣城謝朓北樓」）、「巫峽朝雲暮不歸、洞庭春水晴空滿」（顧況・詩欠）、「晴空星月落池塘、澄鮮淨綠表裏光」（白居易「池上夜境」）は「晴空」の用例。●衝涯―「涯」は水際。「衝」はぶつかること。用例未見。●始変―変わり始めたということ。ようやく変わったということ。ここでは前者。用例未見。●鷗眠白―白い鷗が眠っているということ。「犬吠穿籬出、鷗眠起水驚」（元稹「遣行十首」）、「狂歌紅蓼岸、驚起白鷗眠」（李中「江南重會友人感旧二首」其二）、「渡林鶯咽殘花底、阿岫鷗眠落日中」（『本朝無題詩』卷七・蓮禪「宿葦屋泊」）は鷗の眠りの用例。●暈渚―渚で重なること。ここでは落葉が渚で重なること。用例未見。●唯看―ただ対象物だけが見えるということ。「唯見」とともに詩の慣用語。「唯看孤帆影、常似客心懸」（姚崇「夜渡江」）、「覽鏡唯看飄亂髮、臨風誰為駐浮槎」（包佶「歲日作」）などがある。●鶴跡紅―鶴の足跡が紅葉によって紅になるということ。「桂嶺雨餘多鶴跡、茗園晴望似龍鱗」（劉禹錫「寄楊八壽州」）、「庭霜封石稜、池雪印鶴跡」（白居易「寄庾侍郎」）、「風飄竹皮落、苔印鶴跡上」（白居易「小白」）、「溪畔印沙多鶴跡、檻前題竹有僧名」（李山甫「方干隱居」）は「鶴跡」の用例。●誰識―誰が知るだろうか、ということ。ここでは反語。「誰識躬耕者、年年梁甫吟」（孟浩然「與白明府遊江」）、「誰識臥龍客、長吟愁鬢斑」（李白「南都行」）などがある。●往還―いたりきたりすること。「漁人遞往還、網罟相繁藟」（王績「古意六首」其六）、「堯壇宝匣餘煙霧、舜海漁舟尚往還」（姜皎「龍池篇」）などがある。●漁父意―老いた漁師の気持ちということ。「馬卿猶有壁、漁父自無家」（韋應物「答李瀚三首」其二）、「白鷗漁父徒相待、未掃機槍懶息機」（劉長卿「登松江驛樓北望故園」）「之推避賞從、漁父濯滄浪」（杜甫「壯遊」）、「如逢漁父問、未是獨醒人」（錢起「江行無題一百首」）などは「漁父」の用例。●送秋―自然の景物が秋を送るという擬人的な表現もあるが、ここは秋を過ごすということ。「逃暑迎春復送秋、無非綠蟻滿杯浮」（翁綬「詠酒」）、「夢魂如月明、相送秋江裏」（邵謁「送友人江行」）、「帝里煙雲乘季月、王家山水送秋光」（『懷風藻』「秋月於左僕射長王宅宴」）、「蘭為送秋深紫結、菊依臨水淺黃凝」（『荅家文草』卷五「重陽後朝、同賦花有淺深、應製」）などがある。●多年―永い年月ということ。「旅泊多年歲、老去不知迴」（王績「在京思故園見鄉人問」）、「白首多年疾、秋天昨夜涼」（杜甫「潭州送韋員外牧韶州」）、「勞生繫一物、為客費多年」（杜甫「迴樞」）、「寂寞多年老宦、慙慙遠別深情」（嚴維「答劉長卿」）

卿蛇浦橋月下重送」などのように、嘆老や不遇などの不本意なことを述べるのに使われる語。●老舟中―舟の中で年をとるということ。ここでは漁師をしながら年をとってしまったということ。「遙見舟中人、時時一迴顧」（包融「送國子張主簿」）、「細煙生水上、円月在舟中」（祖詠「過鄭曲」）は「舟中」の用例。

「口語訳」

緑の松江は美しい夕焼けに覆われた。葉は落ちて波が重なるのは、どれ程の里の風が吹いているからであろうか。

落葉の音は沙村を巡って、夕方の雨音と調和し、靄が立ち込めた島で舞い、晴れた空を見え隠れさせる。

水際に突き刺さって、始めて眠っている白い鷗の色を染め、渚に折り重なって、ただ鶴の足跡が紅になるのを見るばかりである。

誰が知るだろうか、永年、水辺を行ったり来たりし、秋を過ごして舟中で老いていく、漁師の気持ち。

「補注」

韻は「籠」「風」「空」「紅」「中」で、すべて上平声第一東韻である。首聯は、「葉」と「落」の語順が変わっているが、題の字の「松江」と「葉落波」を、そのままのつながりで、載せようとする意識が見られる。頷聯では、題の「松江」を「声繞沙村」「影逐煙島」で、「落葉波」を「和暮雨」「動晴空」で表すか。であるにしても、題の、落葉の波というのは、落葉そのものを波のようであると、比喩的にいつているのではなく、水面に落葉が浮かんだ状態をいつているのであるから、「和暮雨」「動晴空」とは視点が異なる。頸聯は、故事を踏まえないが、眠っている鷗と、鶴の足跡という観念的なことを賦す。尾聯では、「松江」と「洞庭湖」の違いはあるが、題の「落葉波」と「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下」（『楚辭』「湘夫人」）との関連を考え合わせると、「漁父」も『楚辭』を踏まえていようか。『楚辭』の漁父は世の清濁に対して臨機応変に対応することを主張しているので、下句の舟中の老いるということとを合わせて、述懐を作者直幹自身に投影すると、聖代いかんにかかわらず、官吏として仕えてきたが、徒に年齢を重ねてしまったという、直幹の嘆老を示したということになるうか。

「本文」

依雨跡句、左詩停滯。同講師持疑已久。判者遂以右為勝。

「書き下し文」

雨跡の句に依りて、左の詩停滯す。同講師疑ひを持ちて已に久し。判者遂に右を以て勝と為す。

「語釈」

●停滯——一詩の句の流が途絶えているという意であろうが、中国詩話にも用例を見出せない。

「口語訳」

雨跡の句によって、左の詩は詩意が切断されている。同じく左の講師はそれについて長いこと疑いを持った。よって判者はついに右を勝とした。

「比較検討」

本詩合初めて理由を明記して、勝敗を決定している。つまり、左の順の詩は、「雨跡の句」で「停滯」していることで負けとなったものである。それは左方の講師も——藤原国光と藤原保光のどちらかは不明であるが——、疑問に思ったという。「雨跡の句」で「停滯」していることは、実際には、頸聯で詩の意が切断されているということである。しかし、そもそも本闘詩あたりから句題詩の形式が整ってきいており、それが厳密であればあるほど、句相互の意味的紐帯は希薄にならざるを得ないはずである。後に『和漢朗詠集』という象徴的な抄句集が出るが、そもそも本朝で現存最古の抄句集『千載佳句』を編んだのは、判者大江維時本人ではなかったか。

『九曆殿記』の天曆四年（九五〇）十月八日の条には、残菊宴の詩宴について、詩を撰んだ後、加えて大江朝綱の詩のなかに佳句があったことで、賞杯を賜ったという。詩宴において、評価されたのは一詩中の一句である。その朝綱は『江談抄』第四によると、村上天皇の勅によって白詩中の第一の詩を撰んだ時、「一句だけでは他に勝るものがあるが、四韻の体を備えている物を撰んだ」と語ったとする。後代の説話であるが、ここに一詩全体の体と、その中の一句に揺れ動く評価の意識が見え隠れする様が描かれている。ちなみにこの時、朝綱が撰んだ一詩のうち、発句を除く他の三聯が『千載佳句』に取られている。

やはり、いくら句題詩の形式が確立されてきたとは言え、一詩の詩情は、統一されていることが理想であったはずで、維時が同じ右方だったという状況を差し引いても、彼の判はそのような抄句意識に走る傾向に対しての自戒の念も込めた発言だったのではないだろうか。

「停滯」というのは、つまりはそれまで「呉松江」について述べられて来た

『天徳三年八月十六日闘詩行事略記』訳注稿（八）

ものが、急に蘇州の洞庭との比較がされていることによるだろう。その上、蘇州の洞庭は、江蘇省の太湖にある山の名であり、落葉で有名な洞庭は、湖南省にある湖であるという誤解を犯している。これについての意識は、やはり後代の説話になってしまいが、『江談抄』第四に、坤元録屏風（天曆三年、天曆十年の間の作）の洞庭湖の題に菅原文時が、黃帝が咸池の樂を催した洞庭の野と勘違いして製作したのを撰者の維時が難じたという、ことにも合致する。

博物の和名には精通していた順ではあったが（『和名類聚抄』）、対策及第していない彼は、中国の地名に関しては軽率だったのか。とはいえ、右方の直幹も「漁父」を屈原とすると、それも湖南省の洞庭湖と解していたことになる。

直幹の「漁父」が普通名詞で逃げられる一方、「洞庭」と明記してしまった順の誤解は動かしがたかったという点に敗因があったと考えられる。

「付記」

本稿は、今まで津田潔と共著として来たものを諸般の事情で小野一人で執筆したものであることをお断りします。

An Annotation on TENTOKUTOSHI(8)

Yasuo ONO

TOSHI imitates UTAAWASE in which the participants vie and the judge decides superiority or inferiority of their WAKA, so TOSHI was named SHIAWAE. TOSHI was held in the third year of TENTOKU(A.D.)),and the oldest SHIAWASE in Japan. The summary of the event of TOSHI is written in TENTOKUTOSHI, so we can learn not only the KANSHI and the victory or defeat but also actual situation of TOSHI. In this note we annotated on the poem No.9.